

# 小説の中の視点と文法

——時制と相を中心に——

守屋三千代

キーワード

視点, 状況, 出来事, 「ル形」, 「タ形」

## 0. はじめに

一個の作品として成り立っている小説の多くは、それが実際のことであれ、架空のことであれ、すでに起きた過去の出来事として作者によって整理され、構成されて描かれたものである。その意味で、小説のテンスは、すべて過去形で示されていてもおかしくないはずのものである。しかし一方で、小説は読み手によって読まれた時、その出来事は再現され、疑似体験されるものである。この点で、文章中に意味的、文法形式的に「現在」が持ち込まれることも、決して不思議なことではない。それどころか、書き手の「時」の流れと読み手の「時」とが交錯することはごく普通に見られるといってよいだろう。

小説の中では、このように過去のことを述べるのに、表現上の効果をねらって非過去形(以下「ル形」)が用いられることは、すでに多くの論文で指摘されている(特に日本語の場合英語などと比べ、顕著だという指摘もある<sup>1)</sup>)。また、こうした表現方法が作者の視点との関係から説明されることもしばしば見られる<sup>2)</sup>。小稿の立場はこの見方自体を直観に合った、有

---

1) Seidensticker, H. G., 安西 1983

2) 小池 1989, 牧野 1979, 宮崎, 上野 1989, 佐伯, 鈴木 1986, 西郷 1989, Seidensticker, E. G., 安西 1983, など

効なものと基本的にみとめるものである。が、文章中に「ル形」が現れる現象は、歴史的現在形による劇的效果、あるいはその場面にいる登場人物の視点から描いた臨場感をねらった、作者の表現意図から選ばれた結果ととらえることで、十分説明されたことになるのか、その点に疑問もある。小稿はこの小説における時制、アスペクトの現れ方に関して、文章構成や表現と文法的な観点から再考するものである。

以下、I では紙幅の都合上、4つの小説の中から選んだ文章を例として、時制や相を表す形式が実際に小説にどのようにあらわれているかをまず観察し、その時の表現上の効果や、そうした表現が作者の表現意図——特に作者の視点のありかた——とどのように結びついているか、小説の進行、構成上どのような位置にあらわれたものかを調べ、他方、この形式はどのような文法的制約を受けているのかを考察する。II では、小説の中の「ル形」「タ形」が、文章中の表現や文章構成、文法的制約上どのような条件が働いて選ばれるのかを I でわかった範囲で、中間報告としてまとめてみたい。

## I. 具体例にそって

以下、小説の具体例を観察、分析するにあたり、次の3点に注目する。

1. 文章例中の「タ形」「ル形」は、小説が語られる過程のうち、状況、出来事のいずれと結びついたものかを調べる。これは主に状態、継続、完了の相に関する観点である。
2. それぞれの形式による表現および文章構成上の効果はどのようなものか、語り手の視点との関連から考察する。
3. 一方でこれらの形式が文法的な制約や許容度とどう関わるかを個々に調べる。

以上のうち、1., 2. についてはあらかじめ整理しておく必要がある。まず 1. であるが、物語は大きく出来事 (EVENT) と場面である状況 (SIT-

UATION) とに分けられる<sup>3)</sup>。物語の進行を出来事の連続から成る横軸とすると、状況は縦軸にあたるものであり、出来事的前提や、出来事の場面や、登場人物の心理も含む様々な状態描写から成るものである。この状況は、何がどうだ、何がどうしているか、ということのをのべるものであって、静的な述語を伴ったり、状態性のアスペクトと結びついて現れることは多いが、変化を除けば完了という概念は要求されにくい。これに対して、出来事は状況に包まれた（この意味で状況は FLAME とみなすことができる）、物語の出来事の一つ一つ、あるいは、さらにひとつの大きな単位となったものとしての出来事であって、それが個々に完了することによって、物語が次に進められていくという性質を持つものである<sup>4)</sup>。また、これは誰が何をどうした、ということのをのべ、動的述語を伴ってしめされるものであるが、アスペクト、特に完了と深く関わるものと考えられる。それは文章において、ひとつの出来事が完了して初めて次の出来事に進むためである。

状況も、出来事もともに語り手の読み手に対する語りの時を基準とすれば主に過去時制（過去において存在したという意味での状況、出来事の時制：語り時を基準とした出来事の時制）がそこにかぶさってくることは当然考えられる。

次に 2. は視点の概念に関する用語の整理である。一般に、語り手の視点を考える際には、何を見ているかその見ている対象（以下、注視点）、と誰の眼から見ているか（以下、注視者）をおさえておく必要がある<sup>5)</sup>。小稿ではさらに、語り手が聞き手（読み手）の方を向いて語りかけているかもこの視点を考える上であわせてとりあげておきたい。（ただし、これは「外の目」「内の目」<sup>6)</sup>とは異なる。この二つは小稿では注視者としての語り手の

---

3) Stubbs, M. 1989

4) Widdowson, H. G. 1989

5) 宮崎, 上野 1985, 茂呂 1985 「児童の作文と視点」『日本語学』12月号

6) 西郷 1989

視点に下位分類される)

以下、注視点に登場人物を含む小説に関し、注視点である人物が三人称 (I-1., 2), 一人称 (I-3., 4.) であらわれる文章を例にとりあげ、考察する。

#### I-1. 『菜の花と小娘』: 志賀直哉

この作品は語り手が菜の花と小娘それぞれの行動、会話を特にどちらかに強い共感をもつということなく、ほぼ一貫して外側から淡々と描写しているという印象を与える。その要因と思われるもののひとつは、作品としては文庫版にして5ページ、計71文ほどの短いものである(ただし会話をのぞく)が、それにしても3例を除く他のすべての文末が「タ形」で終わっている、という点である。日本の小説は、視点が語り手から登場人物の視点に移ると、非過去形の文末をとる傾向がしばしば見られるということはすでに報告がされているが<sup>2)</sup>、この71文中の3例という少なさは、今回小説を調べた限りでは特に目立つものである。もっとも、注目すべき点は多くの文末が「タ形」で終わっているという事実そのものではなく、そのことで視点の移動が極めて少なく、なにか一定の距離をおいたまま淡々と語り続けられているように感じることである。しかし、「ル形」に対立する「タ形」を採用することは常に客観的な描写をめざしてのことなのか、それは断言できるのか。ここではまずその点に注目したい。はじめに、冒頭部分を引用する。

##### 〔菜の花と小娘-1〕

或る晴れた静かな春の日の午後でした ①。一人の小娘が山で枯枝を拾っていました ②。やがて、夕日が新緑の薄い木の葉を透かして赤々と見られる頃になると、小娘は集めた小枝を小さい草原に持ち出して、其処で自分の背負って来た荒い目籠に詰め始めました ③。不図、小娘は誰かに自分が呼ばれたような気がしました ④。「ええ?」小娘は思わずそう云って、起ってその辺を見廻しました ⑤が、其処には誰の姿も見えませんでした ⑥。「私を呼ぶのは誰?」小娘はもう一度大きい声でこう云って見ました ⑦が、やはり答える者はありませんでした ⑧。

左の例の文末はみな「タ形」で示されている。①の「～午後でした」は場面が始めに提示されたところであり、このように冒頭の文が「タ形」で示される例は、今回述べたものの多くに共通し、また①も含め、初出の場面の提示のしかたとしては「ル形」によるよりも一般的である。(昔話の多くがこの形式をとっている。)それは、小説の冒頭が登場人物から見た「時」よりも、まず語り手から見た出来事の時制(過去)の設定を優先することが多いためであると考えられる。ただし、「或る晴れた～日の午後のことです」、あるいは「或る晴れた～日の午後、(中止形)」とすると、この時制は形の上では現れない<sup>7)</sup>。

次の②の「一人の小娘が～拾っていました」の文は、いったん①の文で設定された状況の内部が描写されている。この②は「拾っています」という形にすると、①の文とのつながりが多少悪くなる感じもするが、語り手が小娘とその場に同時にいあわせて、その状況を描写し、中継しているような表現としてなりたつ。少なくとも絵本で小娘が枯枝を拾っている様子が描かれていれば、この文は全く問題がないだろう。この場合、視覚的に場面が与えられることで、眼前の出来事の時制が本来過去時制である語り手を基準とした出来事の時制に優先し、そのため「ル形」が可能となると考えられる。この段階では②の文末、即ち既に提示された状況の内部を語る場合は「タ形」でも「ル形」でも、問題はなさそうだが、次の「やがて～」以下の文とのつながりとなると、「ル形」ではあまり適当でなくなる。かりに「ル形」でとめると、「小娘」が枯れ枝を拾っている、その状況の中で何かがおこるような感じとなる。つまり、その状況で語りの進行がストップし(いわばフレームが固定して)、次に来る文では、そのフレーム内で注目すべき出来事や状況が起こる、あるいはそれが語られるという含意が生じると思われる。そのため、あとにすぐ改行もなしで「やがて～」が続くとどこかしら不自然になるのではないか。逆に、「タ形」

---

7) 例): 芥川龍之介「蜘蛛の糸」の冒頭「ある日のことでございます。お釈迦様は極楽の蓮池のふちを、ひとりてぶらぶらお歩きになっていらっしゃいました。～」

で述べられると、出来事の時制が優先し、その状況に置かれていた視点がいったんそこから遠のくため、物語が一步さきに進められる（ちょうどさきのフレームがカーソルのように動く）という含意が生じるのではないだろうか。「やがて」という時の経過を外側からとらえたことを表す語とつながりがよくなるのも、そのためではないかと思われる。

次に④の「小娘は～気がしました」は「気がします」とすると、状況、出来事といった語りの過程や表現上の効果とは関係なしに、一文レベルでみて文法的に不適切となる。それはこの語が現在形の場合、一人称の場合に限って用いられるためであって、仮に語り手の視点が小娘に移動したとしても、この制約が働いているためであるように見える。たしかに人称制限はありそうだが、問題はそれだけではない。「気がする」は「～と考える、～と思う」と意味的に置き換えることが可能であり、「～」という思考内容を「私は思う、考える」ということ（以下メタ思考）を意味する用法と、「～と（五感で、感覚的に）知覚した」という感覚（以下メタ知覚）を意味する用法とがある。「私はこの訴訟は長引くような気がします」は前者の用法であり、「私は～気がします」の文として「ル形」で現れてもおかしくない。これに対し、「誰かに呼ばれたような気がした」は後者の用法であって、この場合「私は～呼ばれたような気がします」と「ル形」で示すと不自然な文となる。この後者の「～気がした」という文は、すでに知覚内容を示している命題部分に、さらに「私は知覚した」というメタ知覚のマークをつけ、それを述定する文であると思われる。この「メタ知覚」は「（～が～だということ：知覚内容）を確かに私は知覚した」ということを表し、このメタ知覚のレベルでは過去のテンスを必要とするが、それは知覚内容と対立させるため、あるいは知覚内容がテンスを超えたものであるのと対立させるため、あるいはメタ知覚は言葉で実況しにくい、という心理的な制約によるためかもしれない。（この点は認知心理学的な角度から説明ができるかもしれない）そうした理由で、メタ知覚の「～気がする」は「ル形」が避けられ、「タ形」が選ばれるのではないだろう

か。この点で、「ル形」が可能なメタ思考との違いが見られる。なお、この文で「(～誰かに呼ばれたような) 気がしました」とメタ知覚を言語化しているのは、「小娘は～気がしました」と述べられていることからわかるように、小娘ではなく語り手である。

次に⑥の「誰の姿も見えませんでした」は、文末を「ル形」にしても、文法的に成り立つ。ただし、⑥の前の⑤の「～見廻しました」は⑥と同じ文中、状況にありながら、その次の⑦の「云って見ました」同様「ル形」にかえると不適切となる。この⑤と⑦は「～タ」が動作を表す動詞に後接しており、その動作主体がともに小娘であり、その注視者は語り手であるという共通点をもつが、このような場合、動作動詞が現在形であらわれると、それが主体の習性、習慣などでない限り、まるで注視すると同時に主体の次の動作を予測したり指示したり、また未来の予言や卜書きをのべたような文となる。そのため、ここでは「ル形」が不可能となると思われる。これに対し⑥は、いわゆる動作性の動詞に後接しているわけではなく、登場人物である小娘の視点による見え「誰の姿もない」に「見える」というメタ視覚のマーカーがついた形となっており、そのため「ル形」にかえることができると考えられる。このため、メタ視覚はメタ思考と同様「ル形」で示すことが可能であることがわかる。また、⑧の「答える者はありませんでした」は、小娘がとらえた「聞こえ」といった内言レベルのもので、「ル形」にかえることができる。なお、この文を「何の答えも聞こえませんでした」というメタ聴覚の形にかえても、さらに「聞こえません」という「ル形」にかえても可能となる。どちらも「ル形」にかえた場合、いかにも小娘の目と耳で感じとられた表現、つまり語り手から見た語りの時制から解放され、注視者である小娘の視点が優先された、臨場感のある表現となる。この⑥と⑧の場合は、逆にこうした「ル形」のもつ効果が避けられ、語り手の時制が優先されて「タ形」が選ばれている例だといえる。

以上のことから、この『菜の花と小娘』は「ル形」「タ形」の二者選択

が可能な中からいずれかの形式が選ばれている例も見られるが、同時に「タ形」ばかりが選ばれているように見えて、実は文章構成上や、文レベルの文法的な制約の中で選ばれていたという場合があることがわかる。つまり、この小説で「タ形」が選ばれたのは、必ずしも登場人物の視点にひきよせた、その場にいあわせた表現を避けて、淡々と語るためばかりとは限らず、前接する述語の性質などの文法的な制約や文章の語り方にも深く関わっていると考えることができる。なおこのことから各文末を「ル形」「タ形」のいずれにするかということだけでなく、文末に「タ形」の現れる文を並べること自体も、文章の表現法として注目できる。

次に、この小説の中でただ三つ「ル形」が選ばれている箇所を示す。

〔菜の花と小娘-2〕

菜の花は、「恐いわ、恐いわ」と流れの水にさらわれながら、見る見る小娘から遠くなるのを恐ろしそうに叫びました。が、小娘は黙って両手を後へ廻し、背で跳る目籠をおさえながら、駆けて来ます ⑨。菜の花は安心しました。

この場合は「ル形」を「タ形」にかえても文法的に不適格にはならない。この場合は動作性の動詞であるが、「菜の花」が「小娘」を眼前描写している「見え」であるため、「ル形」が可能となっている。かりに、この部分が語り手だけの視点から描かれた表現としてとらえると、不適切となる。ここでも、語り手は登場人物の目をとおさないと、眼前描写がしにくい、ということが考えられる。なお、この表現は前にもみたように、菜の花の視点を通しており、臨場感が感じられるものだが、いいかえると、注視者である菜の花から見た小娘の動作の始まりを表すアスペクトが、語り手の語りの時制に優先しているともとらえられる。ただし、ここで注意すべき問題がある。この「駆けて来ます」は「(こちらに)来ます、やってきます、走ってきます」あるいは「(むこうに)行きます、遠ざかって行きます、走って行きます」と書きかえることは可能だが、「駆けます、走ります」とすると不適切な文となる。つまり、登場人物の眼をとおした眼前描写、つ



まり「見え」であれば「ル形」は可能であるとはあくおさえておくことはできそうであっても、それも動詞の性質次第だといえる。

ところで、この文に先行する「菜の花は～見る見る小娘から遠くなるのを恐ろしそうに叫びました」は語り手が状況をそのまま描写した文のようではあるが、「さらわれ(ながら)」「見る見る」からわかるように、すでに菜の花の目によりそった表現ともなっている(ただし、「恐ろしそうに」「叫びました」は菜の花を外から眺めた表現であり、作者の二つの視点が一文中に混在している)。また、この文の後の「菜の花は安心しました」は、菜の花に共感度の高い文である。それは主題が「菜の花」であるだけでなく、「安心した」が通常一人称を要求する、あるいは話し手が「安心した」ことを十分知っており、それを報告する立場にある場合に限り、三人称で用いることが可能となることからわかる(⑨はこの例である)。そのつながりを見ても、この⑨の文は菜の花の目をとおした表現であることをより強調すると、視点に一貫性が生じる。

しかし、この一種の劇的効果や、視点の一貫性だけから「ル形」が選ばれていると説明できるわけではない。まして、視点は小説中で自在に動くものであって、その一貫性を求める力は必ずしも大きな制約として働かない。またこの場合「タ形」にかえても「～来る」にささえられて、菜の花に視点がよりそっていることに変わりがない。問題は、この文は「タ形」にすると、「ル形」の時とはアスペクトの点で微妙に意味の違いが生じる点である。つまり、「小娘は黙って～目籠をおさえながら、駆けて来ます」の文と「～駆けて来ました」の文の間には同じ菜の花によりそった視点であっても、小娘が駆けてこちらに来るという事実の認め方に微妙な違いがある。前者は菜の花がそれと気づいた時には、小娘が駆けており、むしろ来つつあるその過程に注目している印象をあたえるのに対して、後者は菜の花が恐さのあまり叫び、小娘の方を見ている時に駆け出し、それが今にもここに到着するという点に注目している印象を与えるように見える。恐怖に我を忘れて叫んでいる菜の花の認識の仕方としては、いつからかはわ

からないが、小娘が既に駆け出してこちらに来つつあることを認識した、とするほうが、じっとみつめている過程でかけだす瞬間をとらえたというよりも自然であるだろう。従って、この⑨「駆けて来ます」はいったん菜の花に視点に移り、その結果「ル形」、「タ形」とも選択可能となり、その中でアスペクトの点でより表現意図にそった「ル形」が選ばれた例だといえるのではないか。ここで、さきの問題をふりかえてみると、ここでの「ル形」は眼前で動作の開始をとらえたのではなく、すでに動き始めているという過程の相をとらえていることがわかる。仮に菜の花がじっと動かない小娘を見て、しかも何の根拠もなしにこの言葉を発するとしたら、予言の文となってしまう。（もちろん、根拠のある推量や「きっと来る」といった確信を述べる文であればこの文は可能となる。が、この文章中ではこの設定には無理があるだろう）したがって、動詞の「ル形」の意味が、上のような条件を満たす場合に、登場人物の視点による眼前描写の「ル形」が可能となるという仮説がたてられそうである。

〔菜の花と小娘-3〕

「～こうしているのは気持が悪いの。どうか一寸あげて下さい。どうか」と菜の花は頼みましたが、小娘は「いいのよ」と笑って取り合いません ⑩。

が、その内水の勢で菜の花は～すり抜けて行きました。

この⑩はもちろん「タ形」にかえても文法的には不適格とならないが、菜の花の視点によりそったものであり、かつ小娘の未来の行動をうらなうものではなく、すでに始まっている眼前の状況を表すものであるため「ル形」が可能となっていると考えられる。「～ル」形により、菜の花の目を通した表現を強調する効果が生じ、この場合、菜の花から見て与えられた状況の中で「小娘が取り合わない」という態度がいやになるほど続いている（まだ続きそうだという相も含意する）ことを示し、これによって状況全体が一時ストップしている感じとなる。これに対して、「タ形」であると菜の花の視点を通したアスペクトよりも語り手からみた時制が優先さ

れ、この状況が終了し、次に起こる出来事へと語りが進行していくような感じを与えられると思われる。実際には時間的な経過を経て次の出来事が語られるが、その経過の幅は小さく、そのため「ル形」の方が適切のようにも思える。次の〔菜の花と小娘-4〕の ⑪ の例も小娘の見えがえがかれ、かつ次の出来事までの時間的経過がほとんどなく、同じ状況内部にあることから「ル形」が選ばれたと考えられる。

〔菜の花と小娘-4〕

菜の花は死にそんな悲鳴をあげました。小娘は驚いて立止まりました。見ると菜の花は、花も葉も色が褪めたようになって、「早く早く」と延びあがっています ⑪。小娘は急いで引き上げてやりました。

⑪ の「ル形」は「テイル形」であり、未来を表さず(ここでは継続)、そのため「ル形」が可能となっている。この「テイル」をとってしまうと、ここでは「ル形」は不適格となることから、この「テイル形」も登場人物による眼前描写中の「ル形」を可能とする条件の一つだと考えられると同時に、継続の「テイル」が眼前で始まった動作でなく、既に開始されている相を表すことを含意すると考えられる。この点は、さきの「ル形」の選択条件と合致する。

次の 5 は、例の 2, 3, 4 からすると「ル形」でもよさそうな例を含む。

〔菜の花と小娘-5〕

間もなく小娘は菜の花の悲鳴に驚かされました。菜の花は流れに波打っている髪の毛のような水草に根をからませて、さも苦し気に首を振っていました ⑫。「まあ、少しそうしてお休み」小娘は息をはずませながら、そう云って傍の石に腰を下しました。「こんなものに足をからまれて休むのは、気持が悪いわ」菜の花は尚しきりにイヤイヤをしていました ⑬。「それでいいのよ」小娘は互いました。

⑫ ⑬ はともに「ル形」にかえることができる。それは小娘の内言レベルにある見えを述べた文であり、「テイル」を伴い継続性のアスペクトをそれと相性のよい「尚、しきりに」といった副詞を伴って、表していること

と、これらの文に大きな時間的な経過や、新たな状況を述べる文章が後続しないためであると思われる。ただし、この例では作者の語りの時制が小娘の見えるの相に優先して「タ形」が選ばれている。

以上、『菜の花と小娘』の例からは次のような点が観察された。

- (1) 初出の状況が「タ形」で提示されている。これは語り手から見た出来事の時制の優先を意味すると思われる。(①)
- (2) 既に提示された状況の内部が描写される時は「ル形」が可能であるようだが、状況がそこで終了する場合は、「タ形」のほうが適切でありうる。これは、ここでは過去を表す「タ形」が、状況についての言及を終了することを暗示するためだと思われる。(②)
- (3) 一般に語り手の視点でとらえられた出来事を表す動作性の動詞に後接する場合は「タ形」が選ばれる。(③, ⑤, ⑦)
- (4) 登場人物の視点による眼前の動作や出来事の描写のうち、言葉を発すると同時、あるいはそれ以降に、動作が開始するのではなく、発話以前に動作が開始され、すでに継続の相にある場合は、「ル形」「タ形」ともに可能となる。(⑨) 例えば、走りだしている人間を視覚的にとらえて「来る」と言うのがこれにあたる。これに対して止まっている人間をとらえて「来る」というと、推量の根拠や確信、前ぶれがある場合には動作の予言や確信となり、さもないと書きのような言い方となる。なお「ル形」「タ形」ともに選ばれうる場合、「ル形」を用いると、登場人物の視点によりそい、その結果語りの時制に優先し、臨場感のある表現となる。
- (5) 「テイル」などによる継続性のアスペクトを伴うことによっても登場人物による眼前描写の「ル形」が可能となる。「ル形」で示されると、注視者が感じた継続性がより強まった表現となる。(⑩, ⑪) ただし、継続性を強調しない場合は「タ形」が選ばれる。(⑫, ⑬)
- (6) メタ知覚を示す語に後接する場合は「タ形」が選ばれる。(④)
- (7) メタ視覚を示す語に後接する場合は「ル形」が可能である。(⑥)

- (8) メタ聴覚を示す語に後接する場合は「ル形」が可能である。(8)  
(9) 登場人物の聞こえを表す文の場合は「ル形」が可能である。(8)  
(10) 文章の場面の絵が描かれている場合、読みの時制が出来事の時制よりも優先され、「ル形」が選ばれることがある。(2)

## I-2. 『十三年』: 山川方夫

この作品は1の『菜の花と小娘』にくらべると、語り手がいっそう登場人物「彼」によりそった注視者となって、「彼」の目にみえた出来事や彼自身の心理が細かく描かれた小説であり、われわれがよく接する小説のタイプのひとつでもある。たくさんの小説の文章例からこの作品をとりあげたのは、視点の動きがスムーズで、読み手にとり混乱がないだけでなく、状況、あるいは視点が変わったと思われる箇所、改行がこまめにおこなわれているため、語りの流れや視点の動きが観察しやすいためである。次の例は冒頭の部分である。(なお( )内の番号のうち、(1)~(10)はI-1.で観察したことに相当することを示し、(11)以降はここで新たに観察されたことがらを示す)

### 〔十三年-1〕

明るい昼すぎの喫茶店で、彼は友人と待ち合わせた ①。友人はおくら  
れていた ②。客のない白い円テーブルが、いくつかつづいている ③。  
夏のその時刻は客の数もまばらで、そのせいか、がらんとした店内がよ  
けいひろくみえる ④。

ふと、彼は、彼をみつめている一つの眼眸に気づいた ⑤。～彼は、  
同じ窓ぎわの、五、六メートル先のテーブルのその女をみた ⑥。

若くはない ⑦。女はそろそろ四十歳に近い年頃に思える ⑧。～同じ  
テーブルには、娘だろう、肩をむきだしにしたピンクの服の少女がい  
る ⑨。～

きっと、近くの会社にいる父親——つまり女の夫でも、二人は待っ  
ているのだろう ⑩。

新聞に目をもどしかけて、だが、彼はその和服の女の目が、べつにう

ろたえも、たじろぎもせず、じっと親しげに彼に向けられたままだったのにひっかかった ⑪. 誰だろう ⑫. 誰か知っている人だったか ⑬. 二、三度視線を新聞と往復させ、ふいに彼の喉に叫びのようなものがのぼってきた ⑭.

頼子だ ⑮.

まずはじめの ① の「待ち合わせた」は通例通り「タ形」で前提が述べられている ((1)). ただし、いずれにしても ① は述語が動作主であり、「彼」の見えではなく(それは「彼は～」と主語が示されていることからわかる)語り手の視点で描かれており、また、「彼」の予定や習慣を述べる文脈ではないので「ル形」では不適格となる ((3)). なお「ル形」では、語り手による「彼」の動作の予言、あるいは小説中のト書きとなり不自然である. ② 「おくれていた」は語り手の視点から、「彼」の視点に変え、その見えを「テイル」を伴う「ル形」で表すことが可能である ((5)). ただし、その場合「友人が遅れている」という状況がストップし、クローズアップされ、その状況において「彼」の目の前に何か特定の出来事がおきるという含意が生じる. 実際には、「友人が遅れている」状況は直接次の出来事のフレームとはならないため、ここで終了させ「タ形」を用いたと考えられる ((2)). これに対し次の ③ 「つついている」は「テイル」を伴う「ル形」で彼の見えが示され ((5)), 「彼」の目からみたその場の状況(テーブルが続いている、店内が広く見える)がクローズアップされ、いよいよこのフレームの中で出来事が起こる、その前触れとなっていると感じられる ((11)). 一方、「ひろくみえる」は、「ひろく」は見えの内容であるが、「みえる」はメタ視覚とでもいうべきものである. ((7)) ⑤ の「気づいた」はメタ知覚を示す語であるため、この場合視点を登場人物に移動しても、「ル形」で表すことは難しい ((6)).

⑥ の「みた」は目をそちらに向ける、という動作性の意味で用いられており、この場合作者の視点であるので「タ形」が用いられている ((3)). ⑦ 「若くはない」 ⑨ 「少女がいる」は文章の内容からみて、「彼」の視点

によりそい、その判断、見えをのべたものであるため内言レベルであり、語りの時制から解放され、「ル形」となっていると思われる ((13)). ⑧の「女は～年頃に思える」は一見 ⑤と動詞の意味的特性は似ているが、メタ知覚とはレベルの違いがあり、このような思考に関するメタ思考では「ル形」が可能であるとも考えられる ((3)). (ただし、「彼は～と思う」の場合は、⑤同様「ル形」は不可能である) ⑩「待っているのだろう」は「～だろうと思う」などくらべるもわかるように、⑦⑨同様、判断、思考内容をあらわし、内言レベルの用法をもつため、やはり語りのテンスから解放され「ル形」となる ((13)). ⑪「ひっかかった」は「気づいた」同様一種のメタ知覚を表す語をなすため、「タ形」が選ばれていると思われる ((6)). (ただし、内言レベルにして「～誰だろう、どうもひっかかる」とすれば適.) ⑫「誰だろう」は⑩の内言と同様 ((13)). ⑬「知っている人だったか」は「彼」の内言であるが、過去の情報をさぐる「タ形」の用法であるため、文章の意味からいって「ル形」にはできない ((14)). ⑭「叫びのようなものがのぼってきた」は「ル形」にすることは難しいが、それは「のぼってくる」が一種のメタ知覚を表す語であるためかもしれない ((6)). 例えば、「叫びのようなもの」のメタ知覚のしかたには、「～が浮かんた、が襲った、に襲われた、を感じた」等があるが、これらはメタ知覚のしかたのバリエーションであり、いずれも「タ形」を要求する. ⑮「頼子だ」は「彼」の眼前の状況をとらえた判断内容の内言であり、「ル形」で示される ((13)). ⑮は⑬の言わば答えとなるものであり、「頼子だった」とすることも文法的には可能であるが、それでは自らの問いかけに答えられれば話はそれですむような感じになってしまう. この頼子の連れてくる少女は、当時中学生だった彼と頼子との間の子供であり、頼子とは十三年ぶりに邂逅したわけであり、表現上、「(ああ、そうだな前は)頼子だった」ではすまないのである. なお、ここで作者の視点にそっての「頼子だ」ととらえると、表現上効果が薄れるだけでなく、それでは言葉足らずである. つまりこれでは読み手を不可解なままにおきざりに

してしまうので「それは、彼にとって忘れることの出来ない女、頼子であった」というくらいの説明が必要となる。このことから、逆に、登場人物に視点を移動しておく、内言をはさむことが可能となり、それゆえ聞き手への配慮が不要となるため、説明的な言葉を用いずに伏線となる一文を文脈中に効果的にもちこめることがわかる。

以上『十三年』の例からは、『菜の花と小娘』に加え、次の点が観察された。

- (11) 既に提示された状況の内部を描写する場合、「ル形」を用いると、状況がそこで打ち切れず、状況がストップし、そこで何か出来事が起きることが暗示される。(これは読み手にとって次を読み進める上での指標となる。)(③, ④)
- (12) 登場人物のうち、眼前の対象の状況をとらえた見え、あるいは思考、判断内容(内言)は「ル形」であらわすことができる。(⑦, ⑨, ⑩, ⑫, ⑮)
- (13) メタ思考を表す言葉のうち少なくとも「思える」は「ル形」が可能である。(⑧)
- (14) 登場人物の内言のうち、その人物が過去に得た情報を探る場合は「タ形」が選ばれる。(⑬)。ただし、それも表現上の効果次第で、眼前にとらえた内言が優先され、「ル形」が選ばれることもある。(⑮)

### I-3. 『城の崎にて』: 志賀直哉

この作品からは、虫の習性の描写部分を取りあげる。

#### 〔城の崎にて-1〕

自分の部屋は二階で、隣のない、割に静かな座敷だった ①。～脇が玄関の屋根で、それが家へ接続する所が羽目になっている。その羽目の中に蜂の巣があるらしい ②。虎斑の大きな肥った蜂が天気さえよければ、朝から暮近くまで毎日忙しそうに働いていた ③。蜂は羽目のあわいから摩り抜けて出ると、一と先ず玄関の屋根に下りた ④。其処で羽根や触覚を前足や後足で丁寧に整えると、少し歩きまわる奴もあるが、



直ぐ細長い羽根を両方へしっかりと張ってぶーんと飛び立つ ⑤. 飛立つと急に早くなって飛んで行く ⑥.

この例は、虫の動きを描写した部分である。①「座敷だった」は改行後新たに設定された状況が「タ形」で提示されている ((15)). ②「あるらしい」は既に設定された状況のなかで、そこに登場人物である「過去の私」の内言が「ル形」で示されている ((13)). ③「働いていた」は当時の「私」から見た、「テイル」を伴う表現で「ル形」「タ形」いずれも可能である。ここでは語りの時を基準とした過去の「タ形」が選ばれている ((5)). 少々不思議な用法なのが、④「蜂は～下りた」である。④は習慣を表す文の中で、「タ形」が選ばれており、そのため、そこにいる蜂一般の習性を述べているというよりも、眼前の特定の蜂について言っているような印象を受ける。しかし、前後からすれば、やはり眼前の蜂ではなくこの蜂の習性をさしているのだろう。ということは、この④は習性をのべて、かつ語りの過去の時制がそこにかぶさっている例だ(「蜂は～下り(る：習性)」+「タ：(語りの時制)」)ということになる。これに対し、⑤「飛び立つ」⑥「飛んで行く」の「ル形」は、語りの時制から解放されてこの蜂全体を言わば総称しその習性を述べる用法として選ばれていると思われる ((16)).

以上、『城の崎にて』の例からは、次の点がさらに観察された。

(15) 冒頭以外でも、新たな状況が設定される場合には「タ形」が選ばれている (①).

(16) 習性を表す文では一般に「ル形」が選ばれる (⑤, ⑥). ただし、そこに出来事の過去の時制がかぶさることもある (④).

#### I-4. 『桜桃』: 太宰 治

この作品は、文庫本で9頁、114文(ただし会話文を除く。以下同様)中、「タ形」の文末をとる例が14例にすぎないという点で、少々特異である。機械的に数字をみてもわかるように、『菜の花と小娘』(71文中68例)をはじめ、『十三年』(77文中53例)、『城の崎にて』(197文中144例)と好対

照をなす。まず冒頭を示す。

〔桜桃-1〕

子供より親が大事、と思いたい ①。子供のために、などと古風な道学者みたいな事を殊勝らしく考えてみても、何、子供よりもその親のほうが弱いのだ ②。少なくとも、私の家庭においてはそうである ③。まさか、自分が老人になってから、子供に助けられ、世話になろうなどという図々しい虫のよい下心は、まったく持ち合わせてはいないけれども、この親は、その家庭において、常に子供たちのご機嫌ばかり伺っている ④。子供、といっても私のところの子供たちは、皆ひどく幼い ⑤。長女は七歳、長男は四歳、次女は一歳である ⑥。それでも、既にそれぞれ、両親を圧倒し掛けている ⑦。父と母は、さながら子供たちの下男下女の趣きを呈しているのである ⑧。

この例では語りの時を基準とした「いつ、どこで、だれが、何をしたか」といった場面の設定からは始まっていない ((17))。最初にこの作品のキーセンテンスが語り手の願望(①)や解説(②)の形であげられ、場面設定とともに出来事や状況が描写されるのではなく、「私」の家庭の現在の状況がまるで知識命題の解説のように、「ル形」で一気に述べられている(③～⑧)。その結果、読み手は「タ形」が続く文章からは淡々と出来事を追う感じを受けたのに対し、この「ル形」による解説が続く文章からは、語り手から直接解説をうけているという印象を与えられるように思われる。

〔桜桃-2〕

夏、家族全部三疊に集まり、大にぎやか、大混乱の夕食をしたため、父はタオルでやたらに顔の汗を拭き、「めし食って大汗かくもげびた事、と柳多留にあったけれども、どうも、こんなに子供たちがうるさくては、いかにお上品なお父さんといえども、汗が流れる」と、ひとりぶつぶつ不平を言い出す ⑨。

母は、一歳の次女におっぱいを含ませながら、そうしてお父さんと長女と長男のお給仕をするやら、子供たちのこぼしたものを拭くやら～ハ

面六臂のすさまじい働きをして、

「お父さんは、お鼻に一ばん汗をおかきになるようね。いつも、せわしくお鼻を拭いていらっしゃる」父は苦笑して、

「それじゃ、お前はどこだ。内股かね？」（以下、「」付きの会話が続く）

「私はね」と母は少しまじめな顔になり、「この、お乳とお乳のあいだに、…涙の谷、…」涙の谷。父は黙して、食事をつづけた ⑩

ここはさきの文章のすぐあとに続く部分であり、この小説で初めて出来事の場合が提示されているところである。⑨の「言い出す」は「ル形」であるが、これは、「～と言う」という言葉が発せられる場合、すでに言った言葉をとらえているためであると思われる（(18)）。この点はさきの（4）の条件と部分的に共通する。ただし、問題がある。さきに動作性動詞で「ル形」が許されるのは登場人物の視点による眼前描写の場合であることも条件の一つであると考えたが、かりにこの仮説が妥当なものであるとしたら、この⑨の文は誰の視点によって眺められているのだろうか。「父」でない視点というと、『父』とは同一人物でありながら、一種分裂した人格としての私」でなくてはならない。こう考えると、この「父」は語り手とかさなりあうと思われる「私」であり、それと同時に「私」とともに読み手によって、外側から眺められた人物でもあると思われる。この点は、この『桜桃』が「私」という語り手がある時は「父」、ある時は「夫」、あるいは「おれ」というように巧みに呼びわけられている事と呼応しているのではないかと考えられる<sup>8)</sup>。

⑩「つづけた」の「タ形」は、語り手の視点で描かれているための「タ形」であると思われるが（(3)）、同時に前段を含むこの状況全体の終了の指標となっているように思われる（(2)）。表現上注目すべき点は、冒頭からこの文の前まで、巧妙に「タ形」を用いずに、出来事（ここでは夫婦喧嘩の

---

8) 守屋 1992 (印刷中)

原因)がおきるところまで一気に「ル形」の語りが続いてきて、そしてこの文で出来事が起きたことを語ると同時に「タ形」を用いてストンと段が打ち切られる、という切り口の鮮やかな手法である。かりにこの ⑩ を「ル形」にかえると、段が終了したことの含意が失われる ((10)). なお、この文章のあとには改行後「私は家庭に在っては、いつも冗談を言っている。」で始まる「私」自身や夫婦、家庭の問題の解説が続く。

〔桜桃-3〕

はっきり言おう ⑪. くどくどと、あちこち持ってまわった書き方をしたが、実はこの小説、夫婦喧嘩の小説なのである ⑫. 「涙の谷」それが導火線であった ⑬.

「涙の谷」そう言われて、夫はひがんだ ⑭. しかし、言い争いは好まない ⑮. 沈黙した ⑯. (「涙の谷」は冒頭の母の一言をさす)

はじめに ⑪「言おう」は語り手の決意の内言というよりも、これに続く ⑫「小説なのである」という「のである」の表現と呼応した、どこか読み手にむけて語りかけている言い方であるように思われる。⑪ ⑫ともに、この作品が外側から「この小説」としてとらえられており、時制も作品の出来事の前後関係から選ばれているのではなさそうである。さらに ⑫は「ル形」とはいえ登場人物の視点から見た描写ではなく、読み手に向けて語りかける、読みと語りの時制を同じくする用法であると思われる ((19)).

これに対し、⑬「導火線であった」の「タ形」は単に語り時を基準とした過去の回想を表すのではなく、この作品自体の時間的流れの中での過去(さきに述べた、という意味の過去)を示すと思われる ((20)). ⑭「ひがんだ」もこの ⑬の「タ形」と同様である ((20)). この作品中の過去は同時に読み手にとっての過去でもある。⑮「好まない」は「私」の通常の性向を表すため、「ル形」が選ばれたと考えられる。((16)). ⑯「沈黙した」も⑬、⑭と同様、作品ですでに語られたことをいま一度ふりかえった、という意味の過去を示す ((20)). 以上、『桜桃』では、次の点が観察された。

- (17) 小説の冒頭は必ずしも場面設定から始まるわけではない。(①～⑧)
- (18) 発言を表す語の場合、「ル形」が可能となる。(⑨)
- (19) 「ル形」には語りの時制を読みの時制に一致させるような用法がある(⑪, ⑫)
- (20) 「タ形」は小説の語りの時間的流れにおける過去(文中でさきに述べた、という意味の過去)を表すことがある(⑬, ⑭, ⑯).

## II. まとめ

以上、具体例に従って、文の意味や表現、文章構成にそって、「ル形」「タ形」の現れ方とその用法を調べた。ここに示した結果は質的、量的に小説全体をカバーできるわけでは、到底ない。また、表現は文法的な制約や典型的な小説の構成をむしろ破ったり、新たなものをうちだしたりして成り立つ面もある。が、そこをあえて小説の構成や表現と文法形式との相関を、中間報告として、以下に示しておきたい。

なお、小説の時制としては「タ形」は基本的に無標、「ル形」は有標であり、前者はこの形であらわれるのが一般的であることが多く、後者は選択的に選ばれることが多い。また、小説中に選ばれている「ル形、タ形」は以下の条件のうちの一つによるとは限らず、場合によって複合的な条件から選ばれることがある。今後は一つの形式が選ばれる過程を十分な資料をもとに、今一度検証し、さらに考察を進めたい。

### 「タ形」表現

1. 語り手の語り時を基準とした過去時制の提示: (1) (15) [cf. 9.]  
多く小説全体、あるいは新段落の冒頭で用いられ、語り手の語り時優先により状況や出来事の時制が提示される。
2. 状況終了の標識: (2) [cf. 7.]  
状況描写終了の指標となり、かつ新状況への移動を含意する。
3. 文章の語りの前後関係を示す: (20) [cf. 8., 9., 10]

「さきに述べた」という意味での文章中の過去。同時に読みからみた過去でもある。

4. 登場人物の内言(回想): (14) [cf. 12]  
文章中のある時から見て、それ以前のことに關する登場人物の内言。
5. 語り手、登場人物による他者の動作、出来事の描写: (3) [cf. 13, 14]  
動作性動詞が、「ル形」にすると、眼前あるいは未来での動作の開始(多く、予言や確信をもった推量あるいはト書き)を意味する場合。
6. 登場人物のメタ知覚の描写: (6) [cf. 14]

#### 「ル形」表現

7. 状況継続の標識: (11)  
状況が継続し、その状況内で出来事が起こることを含意する。
8. 絵などの状況設定による、読みと語りの同時進行: (10)  
読みの時制が語りの時制に優先する。(絵本などの例)
9. 場面設定を伴わない解説文の場合の、読みと語りの同時進行: (17)
10. 読み手に直接語りかける場合の、読みと語りの同時進行: (19)
11. 超時制: (16)  
描写の対象の習性、習慣、属性などを表す。
12. 登場人物の「内言(見え)」「聞こえ」の描写: (9) (13)
13. 登場人物の視点による眼前の他者の動作、出来事描写: (4) (5) (18)  
「ル形」の動詞が動作性であっても、言語化する際にすでに眼前におこっている動作をとらえていることを意味する場合や、「テイル」を伴いすでに状況がおきていることを含意する場合、および、「言う」などの発話を表す動詞の場合には、「ル形」による眼前描写が可能となる。[cf. 5, 14]
14. 動作性動詞の「ル形」が言語化した時点より未来におこる動作を意味する場合、語り手や注視者の確信や予言およびト書きをあらわす。

[cf. 5, 13]

15. 登場人物のメタ視覚, メタ聴覚, メタ思考の描写: (7) (8) (12)

《参考文献》

- Fowler, Roger 1985 豊田昌倫『言語学と小説』紀伊國屋書店  
福地 肇 1985『新英文法選書第10巻 談話の構造』大修館書店  
Hinds, John 1986 Situation vs. Person Focus くろしお出版  
今井文男教授古稀記念論集刊行記念委員会編, 発行 1986『表現学論考 第二』  
久野 暲 1973『日本文法研究』大修館書店  
小池清治 1989『日本語はいかにつくられたか』筑摩書房  
国立国語研究所 1983『談話の研究と教育 I』大蔵省印刷局  
国立国語研究所 1985『現代日本語のアスペクトとテンス』秀英出版  
Levinson, Stephen 1983 安井 稔, 奥田夏子『英語語用論』研究社出版  
牧野成一 1978『ことばと空間』東海大学出版会  
宮崎清孝, 上野直樹 1985『認知科学選書 1 視点』東京大学出版会  
守屋三千代 1992 (印刷中)「小説の中の視点と語り——人物呼称を中心に——」『講座日本語教育』早稲田大学日本語研究教育センター  
成瀬武史 1989『意味の文脈』研究社出版  
佐伯梅友, 鈴木康之監修 1989『文学のための日本語文法』三省堂  
西郷竹彦 1989『西郷竹彦文芸教育著作集 第17巻』明治図書  
Seidensticker, E. G., 安西徹雄 1983『日本文の翻訳』大修館書店  
Stubbs, Michael 1989 南出康世, 内田聖二訳『談話分析』研究社出版  
Stanzel, Franz K. 1989 前田彰一訳『物語の構造〈語り〉の理論とテキスト分析』岩波書店  
Weinrich, Harald 1971 脇阪 豊, 大瀧敏夫, 竹島俊之, 原野 昇共訳『時制論 文学テキストの分析』紀伊國屋書店  
Widdowson, H. G., 1989 田中英史, 田口孝夫訳『文体論から文学へ』彩流社

《雑誌》

- 『日本語学』特集 文学の文法 1987 11月号 明治書院  
『日本語学』特集 文章の視点 1985 12月号 明治書院  
『月刊 言語』特集 談話研究の新展開 1990 vol. 19 No. 4 大修館書店